

南京大虐殺紀念館・名誉館長講演会

日 時：2016年12月13日（火）18：00～20：30

会 場：石川県教育会館 2階第1会議室

主 催：南京大虐殺・金沢講演実行委員会

演 題：世界の記憶と平和構築に努力する

—どのようにして南京大虐殺紀念館の館長になったのか—

講 師：朱成山さん

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館・名誉館長（前館長）、
中国人民抗日戦争史学会・副会長

[ビデオ上映]

日本テレビ・ドキュメンタリー番組

「NNNドキュメント15 南京事件 兵士たちの遺言」

（約45分の番組を約30分にカットして上映）

ビデオ解説：田村光彰（発言は省略）

司 会：半沢英一

これから南京大虐殺紀念館・名誉館長講演会を開会したいと思います。それでは最初に、実行委員会の代表の一人であります金沢市議の森一敏さんから開会の挨拶をしていただきます。

開会の挨拶：森 一敏

皆さん、ようこそお集まりいただきました、ありがとうございます。こんばんは。実行委員会を代表して簡単にご挨拶を申し上げたいと思います。きょうのメインゲストは、侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館、これが正式な名称ですけれども、そこで三代目の館長として、事実上、国際的な博物館にまで育て上げた大変なご功績を残された朱成山前館長。そこに聴衆の一人のようにして座っておられますけれども、お招きすることができました。きょう皆さんにお配りをしている資料、ここに名誉館長の講演の詳細、これを資料として配付されています。これに沿った形で後程、館長が紀念館をいかにして育てたか、そしてご自身がゼロからのスタートだったと、その過程の中には様々な出会いとか事実との遭遇、そういうものがあつたということがこの中に書かれています。私たちはその歩みに、きょうこれから謙虚に学んでいきたいと思っています。

きょうは12月13日、1937年の12月13日に南京城が攻略をされた。この金沢は

当時の上海派遣軍の主力、上海派遣軍から今度は中支那派遣軍というふうに編成替えになりますけれども、一貫してその主力であった第九師団、この本拠が金沢城にあったということは、皆さんもご承知のとおりです。従いまして、とりわけ九師団の中でも、更に精鋭というふうに、郷土では譽(ほま)れの部隊と言われていたそうですけれども、歩兵第七連隊、これが光華門から二番乗りをしたというのが、きょうこの日です。ですから当時の子どもたちは提灯(ちょうちん)行列でこのことをお祝いした、これが私たちの町なんですね。ですから南京大虐殺の歴史的な事実をしっかりと勉強をして、それを後世に語り継いでいく、それはもう金沢市民の歴史上の、歴史的な責任であろうと、こう考えていまして、私たちは1997年の、南京大虐殺から60ヵ年、これを記念する年に全国の運動に呼応して、金沢でも「南京」60ヵ年金沢連絡会というのをつくりまして、それからずっと毎年、証言者の方、生存者の方をお招きして証言集会を開催してきました。その証言者の方を送り出してくださったのが朱成山名誉館長であったということも、ここで皆さんにご紹介しておかなければならないと思えます。私自身はきょうで5度目の久しぶりの再会です。元気なお姿に接して、これからお話を伺(うかが)えるという大変幸せなことだなあと思っているところです。

きょうお配りした資料の中でどうしても触れておかなければならないのは、もう一枚、裏に新聞記事が載っているこの資料です。去年の10月にユネスコの世界記憶遺産に南京大虐殺関連の史料が登録をされた。そのことに対して、某全国紙[産経新聞]が大変悪意に満ちた、そういう記事を掲載したわけです。この裏側に自民党の外交部会とか文部科学部会とか、そういうところが連名で決議文を出しているんですね。先程観ていただいたビデオ、それは南京で起こったことのほんの断片なわけですが、実際に南京行政区ですね、南京城内だけではなくて、当時、南京行政区と言われていた広域な地区で繰り広げられた、この歴史的な事実というものは、このユネスコ登録に抗議している人たちは認めたくない不都合な歴史事実であるということだと思います。自民党の政治家たちが内閣と連携をして、金を引き上げるぞと脅(おど)しをかけて、ユネスコの世界記憶遺産登録を阻(はば)もうとして、大変醜(みにく)い攻撃を現在も続けている。このことに対して、きょうお集りの皆さんと一緒に本当に怒りをもって、私たちはそれを許さないと、そういう意思をこの集会を通じてぜひ示していきたいと、このことがきょうの集会に込められたもう一つの意味だということ、ぜひ皆さんと共有していきたいと思っています。

日本の平和学習とか戦争学習というのは、広島、長崎、あるいは空襲、これを拠(よ)りどころにして教育活動が行なわれてきたということが言えるかと思えます。これらも重要な歴史的な事実ですが、しかし日本がそのような攻撃を受けるという状況になりましたのは、長い長い戦争の歴史の中で最後の、長く見ても2年間と言ってもよろしいのではないのでしょうか。ではそれ以前に戦場はどこだったのか。その戦場で私たちの先祖が、兵士や様々な役割をもって出向っていたアジア大陸で何が起こされていたのか。このことが余りにも語られてこなかったということを感じるわけです。それがそのような大変世界から恥ずかしい、ユネスコに対する日本政府の、あるいは政権与党の攻撃、そしてこの金沢でもこの南京の事件が一番の焦点になって、育鵬社の歴史教科書の採択にまで至ってしまった。私は議員という立場ですから、大変重い責任を私も感じている者の一人なんですけれども、これがこの南京大虐殺事件をめぐって、この歴史修正主義というものがここまで、私たちの身近なところまでやって来ている。このこともこれからどうしていくのかということを考えていくうえで、これも皆さんとこの事態というものを深刻に受け止めて、議会对応しなければならない

ことだなあと感じております。

このあと存分に朱成山名誉館長に話をさせていただきます。皆様方にはぜひ存分に考えいただきまして、今いくつか課題を申し上げましたけれども、地域からやはり世論を巻き起こしていく、その一人一人の火種（ひだね）になっていただきますことをお願いいたしまして、私からの開会のご挨拶とさせていただきます。朱成山名誉館長、ようこそいらっしゃいました。どうもありがとうございます。

司 会：半沢英一

どうもありがとうございました。それでは朱成山南京大虐殺記念館名誉館長と、それから通訳をしていただく、大阪から来ていただいた墨面（モーメン）さん、お二人を紹介いたします。

ではよろしくお願ひします。

講 演：朱成山さん（通訳：墨面さん）

[パワーポイントを使用して説明]

皆さんこんばんは。私の記憶によりますと、1996年と2003年に私は金沢を訪れています。きょうは3回目になります。主催者の方々の招請に対して心からの感謝を述べたいと思います。そしてこの場で皆さんと共に「世界の記憶と平和構築に努力する」というテーマで交流をもちたいと願っているわけです。そして何よりも、この雨の中をお越しいただいた皆さんに対して、心からの感謝を述べたいと思います。会場を見ておりますと、古い友人たちもたくさんいます。南京を訪れた方々もおられます。そしておそらくまだ南京に来られていない若い人たちの顔もいくつか見ることができます。非常に楽しみにしております。先程の森先生の私に対する紹介に対しても感謝を述べたいと思います。

今回、私は12月2日に上海から福岡の空港に着きました。そして熊本、長崎、福岡、広島など各地で講演をしました。ここ金沢でちょうど10番目になります。きょうは12月13日です。きょうの午前10時から南京の記念館においては公祭、公の慰霊祭が行なわれております。その日にこの金沢でこうして皆さんとお話できるのは非常に有意義な、意味深いものだと思っています。今回再びこの金沢を訪れることができたのは、昨年、私が記念館をようやく退職しまして、少し時間的な余裕ができたということで今回訪問することができました。

私は1992年に館長になりました。その後23年間その職務に就くわけですけれども、その間たくさんの人たちとお会いすることができました。日本の元首相であります村山富市さん、海部俊樹さん、鳩山由紀夫さんなどとも面談しました。特に印象深いのは2009年に政府の代表団として日本を訪れて、そして当時の与党・自民党の首相・麻生太郎とも面談をしました。それ以外にも興味深かったのは、北京において13の日本の右翼政党・団体の代表たちとの会談がありました。これも非常に興味深いものでした。中日韓の三地域のいわゆる共通教科書制定の、そうしたシンポジウムにも参加しました。

南京大虐殺との関わり

私の南京大虐殺との関わりは三つの段階があります。

まず最初は、祖父からの伝承です。私は南京の出身で、祖父は当時南京市内の銀行に勤めておりました。そして日本軍が来るということで、長江を渡って避難していたわけです。しばらくして南京が一定の安定を得たということで、南京市内に戻ってその銀行に再び勤めます。その時の記憶で、川を渡るときにはもうかなり時間が経っていた頃ですけれども、まだ川面(かわも)にはたくさんの死体が浮いている状態でした。そしてその銀行の前に小さな空き地があるわけですが、そこにもまだ死体が放置されているという状態でした。この祖父が務めていた銀行は今もそのままの状態です。

第二段階は、私は20年にわたって軍隊にいました。私の戦友、同僚の一人に、いわゆる部隊の専属の作家がいたんですけれども、徐志耕という方です。この方が南京の街々の非常に狭い所も含めて自転車で回りながら、老人たちから口述証言をとっていました。そしてそのたくさんの証言を一冊の本にします。『南京大虐殺』という証言集です。これは中国では最初の証言集だと思います。この本の中から私は李秀英(リ・シューイン)さん、あるいは夏淑琴(シャ・スーチン)さんという幸存者の方々の口述を知ることになったわけです。

第三段階は、これは南京大虐殺について最も深く研究し、そして関わった時期であります。これは要するに1992年に私が南京大虐殺記念館の館長になって、それから23年間の間に学び、あるいは収集した資料の中から南京大虐殺の真相をさらに深く知ることになります。

解説員

私は記念館で館長という仕事に関わりながらも、要人が来たときには解説員の役割も引き受けました。この写真に出ているのは習近平さんが訪れたときの解説です。こうした中国の要人たちに解説をするという機会は多々あったわけですが、その中でも特にこの習近平さんはこの事件に対して非常に熱心に勉強しておりました。当時、私に対して68項目の質問を矢継ぎ早にしてくれました。当初は30分の予定だったんですけれども、どんどん延長されて最終的には72分におよんで参観しました。

これは先程も言いましたように、日本の元首相の方々への解説です。

これはご存知のように、アメリカの元大統領のカーター氏です。

この方はデンマーク国王のマーガレット二世です。

これも皆さんご存知だと思います。ノーベル文学賞の大江健三郎さんです。

この方は台湾の星雲大師という方で世界仏教協会の会長です。この星雲大師について少し説明させていただきます。この方が出家し仏門に入った、そのきっかけはまさにこの南京大虐殺でした。彼の父親が実は南京大虐殺の犠牲者の一人であったわけです。彼が出家する大きなきっかけになりました。この父親が南京で虐殺されて、その同郷の方が田舎(いなか)に戻って、父親が殺されたという知らせをしてくれました。当時12才でありました、この星雲大師を連れて母親が、川を渡って父親の遺体を探すわけですが、1週間にわたって探しました。しかし、結局は見つけることができなかつたんですね。この星雲大師は、まだ12才の彼は、長江の麓(ふもと)にあるお寺で出家してお坊さんになりました。その後、1949年に台湾に渡るわけですが、彼の心の中にはずっとこの南京大虐殺の残虐な情景が原点としてありました。そしてあるとき彼がロサンゼルスへ行ったときに、現地の画家にお願いして、自らの

心の中にある風景を絵にしてもらいました。その絵は、死体が折り重なった、そうした非常に悲惨な情景を描いたものでした。これがまさに彼の原体験であったわけです。そして、その絵は今日、記念館に贈呈されて保管されております。

特別展示

これは、本館の展示とは別に特別展示を開いております。これは東史郎日記に関する特別展示です。東史郎さんの日記が日本で裁判になったというのを皆さんご存知だと思います。彼が従軍していたときに南京で起こった出来事を日記に記しました。その内容が偽物（にせもの）だということで、右翼勢力によって訴えられるわけです。しかしその後、彼が日記に記されたいくつかの事象に対して、私たちは南京市内において実証しました。例えば水の中で、中国が当時使っていた手榴弾（しゅりゅうだん）が爆発するのかどうか。そして、爆発するまでどのくらいの時間があつたのか。そうしたものを実際に当時の手榴弾を爆発させて、完全に日記の記述がまったく事実であるということを証明しました。それにも拘（かか）わらず、残念ながらその裁判自体は敗訴になりました。

2014年には「第二次世界大戦における大虐殺と民衆受難」という特別展示を行いました。この中では当然、南京大虐殺以外に、例えばアウシュビッツである、あるいはマニラの大虐殺である、あるいは広島原爆である、そうしたアジア民衆の、世界の民衆の受難の歴史を皆さんに伝えるという役割を果たしました。

私たちの記念館は決して南京大虐殺の史実を訴えるというだけの場所ではありません。民衆の受難を世界の人々に知ってもらおう、そうした目的もあるわけです。今申したとおり、私たちの記念館はもちろん南京大虐殺が主になりますけれども、他の民衆受難の歴史もたくさん展示しております。そういう意味で私たちは世界を視野に置いた平和記念館という役割も、この記念館は担っています。

出張展示会

私たちの記念館にはたくさんの方が来られますけれども、同時に、いわゆる出張展示というものも行なっております。これはまずは北京で行ないました。その後、瀋陽、武漢、広州、上海など26カ所の都市で行ないました。

これは1995年、日本で初めて名古屋で展示会を行ないました。当時、日本の35カ所で展示会を行ないました。最も遠い所は鹿児島になりました。

これはデンマークにおける展示会です。

これはイタリアのローレンスでの展示会です。

これはロシアのモスクワでの展示会です。

アメリカのサンフランシスコでも展示会を行ないました。

誰もが南京に来てこの展示を見ることができないわけではないので、私たちのほうからその真実を知ってもらうために各地に出張展示をしております。

慰霊活動

次に、もう一つの私たちの記念館の重要な柱になります、慰霊活動についてお話しします。私たちの国の慰霊祭というものは、実に始まったのが非常に遅いんですね。何と1994年12月に初めてこの慰霊祭が行なわれました。例えば広島であったり、アウシュビッツであったり、真珠湾であったり、非常に早い時期から慰霊祭を行なっているにもかかわらず、中国においては漸（ようや）く1994年に慰霊祭が行なわれまし

た。これも実は中国で最初の慰霊祭であったわけです。

なぜ 1994 年 12 月にこの慰霊祭が初めて行なわれたのかと言いますと、その年の 8 月に、夏淑琴さんという生存者がいるんですけれども、その方を連れて初めて日本を訪れます。南京の生存者が日本を訪れるのはこのときが初めてでした。各地を講演します。東京、神奈川とかで講演するわけですが、広島に行く機会がありました。そのときに、何とその追悼式に、当時私が聞いたのには、11 万の人たちが参加する。日本の首相、そして衆議院・参議院の議長など、そうそうたる政府の関係者が出席する。そういう慰霊祭が行なわれているというのを知りました。そしてその数日後にはそのまま長崎に行って、長崎でも行なわれる。これが延々と戦後続いていたということを知って、非常に大きなショックを受けるわけです。

なぜこれまで、1994 年まで中国でまったくこのような慰霊祭が行なわれてこなかったのか。いろんな原因があると思いますけれども、まず最初に文化の問題があるかと思えます。中国社会においては往々にして、いわゆる英雄賛美、英雄の物語だけが強調されるわけです。受難者、被害者の悲惨な体験は余り語りたがらないわけです。それは例えば、いわゆる性暴力の被害者「慰安婦」の問題であったり、細菌戦の問題であったり、化学兵器の犠牲者であったりするわけですが、彼ら、彼女らが被(こうむ)ったこういう悲惨な体験を表沙汰に余りしたくないという、そういう文化が残念ながらあったのも事実です。

私はその後中国に戻って関係方面に打診をしました。やはりこうした犠牲者を追悼する行事は必ずやるべきだと。これは広島のみならず世界のどの国でも犠牲者に対する追悼を行なっている。もしこういうことを行なわなければこの記念館の歴史が消えてしまう。あるいは若い人たちにこうした歴史が伝わらない。そういう意味ではどうしても中国においても開くべきだというふうに説得しました。

最初の、1994 年の第 1 回目は規模も小さかったです。参加者も 600 人程の慰霊祭でした。しかし私たちは小さいながらも、立派な主題を提起しました。それは「歴史」と「平和」というテーマを掲げました。この小さいながらも慰霊祭を開くことができ、三つの効果があったというふうに思います。

一つ目は、この慰霊祭が社会的にも評価されて、地方的な行事でしたけれども、その後 20 年にわたって、この慰霊祭を延々と続けることができたということです。

二つ目は、こうした私たちの慰霊祭は他の都市にも大きな影響を与えました。最初に開かれてから 6 年後になりますけれども、例えば瀋陽であったり、哈爾濱(ハルビン)であったり、北京であったり、上海であったり、いろんな都市で、その地域では初めての慰霊祭が行なわれるようになりました。その慰霊祭の形式も、私たちが行なった形式と非常に似た形式を採りました。

三つめは、こうした慰霊祭に感銘を受けた全国人民代表、日本で言えば国会議員のような方々 5 名が全国人民代表大会で、この追悼会を国の行事としてするべきだという提案を 3 年にわたって行ないました。そして 2014 年、ついにこの慰霊祭を国家の行事とするということが法律でも明記されました。そして 2014 年から毎年、国家行事としてこの慰霊祭が行なわれるようになったわけです。中国では「国家公祭」と言います。公の慰霊祭ということですが、国家公祭になったのを機に私は一冊の本を書きました。その題が『第 21 回目の国家公祭』というタイトルです。なぜ 21 回目と言ったかと言いますと、先程言いましたように、その前の 20 回は地域的な非常に小規模のものであったためです。この国家公祭になってから、この慰霊祭の規模、格は数段上がりました。

この映像の中に出てくる3人の方、旗を掲揚（けいよう）する人たちは、これは天安門の旗を掲揚する専属の部隊です。右は陸海空、三軍の儀仗兵（ぎじょうへい）です。これも北京からわざわざ来ていただいたものです。習近平さんも参加して重要な談話を発表しました。右下の写真は習近平さんと夏淑琴さん、生存者ですね。その隣（とな）りの子どもは犠牲者の孫です。こうした三代にわたる人たちを前に置くことによって、この記憶を歴史に残すという決意を示したものと私は考えています。

これは中央テレビが公祭になったということ、そしてこの具体的な活動の内容を非常に長時間にわたって放映しました。

調査活動

私たちの記念館の仕事はもう一つ、調査活動があります。毎年、人を動員して調査活動を行なうわけですが、1997年に行なわれた調査活動は非常に大規模なものでした。学生たち14,700人余りを動員しました。その中には日本から来られた26人の高校生、大学生などがおります。この14,700人余りの学生たちによって、南京における老人たちを隈（くま）なく調査をしたわけです。当時、南京は560万の人口でしたけれども、その中で70才以上の人を片っ端（かたっぱし）から隈なく調査をしました。その結果、2,300件余りの証言を得ることができました。その後、専門家によってその証言の信憑性（しんぴょうせい）の調査が行なわれました。そして、最終的には公の資料として1,200件余りの証言を得ることができました。こうした調査は恒常的（こうじょうてき）に行なわれております。南京市のみならず、中国各地に生存者がいると聞くとそこへ行って調査をします。国外にも行きました。アメリカにも行きました。

これは私がごく最近出版した本『南京大虐殺 生存者の証言』です。生存者の証言を記録したものです。この本は現在8カ国の言語で出版されております。もちろん日本語のものもありますので、後程主催者の方に贈呈したいと思っております。

私たちの記念館に来られた方はこの道を記憶しているかと思っております。この道は証言者の足跡を残したものです。証言と共に、彼ら生存者一人一人の存在を後世に残すという意味でこの道を造りました。これはかつて私がアメリカのハリウッドにたまたま行ったときに、ハリウッドにあるハリウッド・ウォーク・オブ・フェームという、有名人の足型を残している所があるんですけれども、それを参考に造ったわけです。当時、資金がなかったんですけれども、江蘇省の教員組合に呼びかけてカンパを募（つ）って、この「歴史の証人」というテーマにした銅板の道を造ることができました。

資料収集

南京大虐殺は否定しがたい歴史的な事実です。しかし、この事実を証明するためには、たくさんの文物、あるいは文史資料（ぶんししりょう）が必要になると思っております。私たちはこの間、23年の館長をしていた間にたくさんの各地を回って資料を集めました。今日では16万におよぶ自筆資料、あるいは15,000におよぶ文物資料を保管しております。

この写真は、丹後半島に住まわれている、先程言いました、東史郎さんのお宅に3度訪れて資料を集めました。

これはアメリカのエール大学の資料館を訪れたときです。なぜエール大学に行ったかと言いますと、当時、南京で活動していた伝道師の方々の資料がこの大学に集められているそうです。

この写真左は、アメリカのニューヨークに行ったときに、皆さんご存知だと思いますが、マギー牧師の息子さんの家に行きました。そして、マギー牧師が当時、南京にいたとき、16 ミリカメラで当時の情景をたくさん撮影しておりましたけれども、その現物のテープとその撮影した映写機が彼の家に残されておりました。それを贈呈していただいたわけです。この資料は最も重要な意味を持っております。後に世界記憶遺産に登録するわけですがけれども、その重要な証拠の一つとして、これが役割を果たしたわけです。

これもアメリカのリコスさんのお宅を訪問したときのものです。この方のお父さんも当時、南京の金陵大学で教授をしておりました。家族に送った手紙がたくさんあったようです。その中に南京大虐殺を描写したものがあるということで、その手紙も見ることができました。

これも皆さんご存知だと思います。ヴォートリンという方がおりました。当時、南京の国際安全区の中で婦女子を専門で守る、そういう収容する所にいたわけです。中国では9,000人の女性たちをこの方が守ったということで、非常に尊敬されている方ですがけれども、彼女の孫娘がまだ健在でした。そこからいろいろな資料をいただくことができました。

これはミルズという方、今、養老院にいるんですけども、この方に資料をいただいたときの情景です。

これは2003年にワシントンDCにある国家級の資料館の中にある資料を集めました。ここには当時の極東国際軍事裁判[東京裁判]における、南京大虐殺も含めてですけれども、すべての審判資料が保管されています。

これ以外にもヨーロッパ各地にも行きました。ドイツあるいはデンマーク、イギリスなどに行きました。その中でも有名なのは、皆さんご存知のシンドラールとか、例えばドイツのときにはジョン・ラーベのお宅にも行きました。「ラーベの日記」は皆さんご存知だと思いますけれども、お孫さんがそれを保管していたわけです。それと同時に、実はその「ラーベの日記」と共に、当時撮影した写真が126枚見つかりました。この写真が非常に重要なものでした。それはその写真の裏に、細かくその写真がいつどこで撮られたものであるか、どういう状況であったかというふうな内容が、非常に詳細に書かれていたわけです。この南京大虐殺の歴史を研究する者にとっては、それはこの上ない重要な資料になっております。

もちろん日本にも何度も調査団を派遣しました。日本においては、当時の雑誌、あるいはビラ、そして何よりも当時この南京戦に参加した日本兵の日記などの資料を集めるのがその目的でした。現在、私たちのこの記念館においては、254人におよぶ日本兵の資料を得ております。先程この開会のときに観た映像も非常に重要な映像だというふうに思いました。後程また改めて観たいなあというふうに思っています。

遺骨発掘

これは1998年から2000年までの3年間にわたって行なわれた遺骨発掘、当時、万人抗(まんにんこう)と呼ばれていますけれども、そこでの遺骨発掘の様子です。なぜ1998年にこの遺骨発掘を始めたかと言いますと、その年、私はある機会に日本に行きました。そして講演会でお話をしたんですけども、その会場に、ある初老の人が立ち上がって、手に『大東亜戦争の総括』という、いわゆる日本の右翼が書いた本を持って「今、南京の記念館に展示されている遺骨は、あれは偽物だ」というふうに言いました。こうした言いがかりをつけられるにあたっては、実は私たちにもやっぱ

り少なからず問題があったというふうに考えています。当時経験不足もあって、発掘した遺骨を現状のまま保存することなくそれを取り上げて、物によっては、例えばそれを洗ったりして展示するということをしてしまったんですね。そういうことによってこういう難癖（なんくせ）をつけられたわけです。それで、それから大分時間が経ったので、もう一度発掘をしようということになりました。実は発掘するのはそう難しいことではないんです。南京の記念館自体が広大ないわゆる万人抗の上に建っている記念碑なんですね。だからまだ当時発掘されていない、工事が進んでいない所を掘れば、実は万人抗があるわけです。ここを当時調べて、この一角がまだ掘られていないということで発掘調査を新たに始めました。この発掘に当たっては正式に考古学者、そして法学者を招請しました。彼らが発掘した一つ一つの遺骨について観察と検証を行ないました。皆さんご存知のように遺骨は、頭蓋骨の割れ目の幅、あるいは口の形、あるいは胸骨の幅などで、年齢とか男女とかが分かるわけです。こうした埋葬地、万人抗の記録がたくさん残されております。当時遺骨収集した人たちの記録が残っているわけです。その場所の記載もあったわけですがけれども、私たちはその発掘に際して、この記載通り実はそこが池になっていて、その中に死体を投げ入れては土を被（かぶ）し、投げ入れては土を被し、という記載があるわけです。その記載通りその遺骨は七層になっておりました。記載と実際とがまったく合致したわけです。更にこの遺骨の一つ一つを検証する中で、最終的にこの遺骨の中に 32 の子どもの遺骨があるというのが分かりました。最年少は 8 ヶ月でした。1 才、2 才の遺骨もたくさんありました。そして 70 才過ぎの遺骨もたくさん出ております。当時、この本の中にも右翼が言うように、それは日中の交戦によって死んだ兵士の遺骨だというふうに嘯（うそぶ）いております。でもこの結果、その 32 人の子どもの遺骨、たくさんの老人の遺骨から、そうした言説がまったく根拠のないものだということが証明されたわけです。この万人抗の発掘から、南京大虐殺は民衆の受難であるということが証明されたかと思いません。

それ以外にも、私たちの記念館では何回かにわたってシンポジウムを開き、あるいは学術研究会を開き、そしてたくさんの出版物も出しております。

犠牲者 30 万人説

ここで、いわゆる南京大虐殺の 30 万人説という根拠はどこにあるのかということについて、特に少し詳細にお話したいというふうに思います。その説明をする前にぜひとも皆さんには知っておいていただきたいと思います。この人数をより多く言おうと、より大層（たいそう）にしようというつもりもまったくありません。それが 1 人であっても、10 人であっても、100 人であっても、それは一人一人の命であります。そしてその背後にはたくさんの家族の不幸があります。そうした思いを、一つ一つの思いこそが大切だというふうに思います。ただ、この人数問題がこの南京大虐殺の本質、規模などをはかる非常に重要な意味をもっているということで、敢（あ）えてこの 30 万人という数字に対しての説明を今からしたいと思います。

まず皆さんに知っていただきたいのは、この「30 万人以上」という数字は歴史の判決であります。あるいは法律による決定であります。皆さんご存知のように、南京軍事法廷がありました。そして、東京の極東国際軍事裁判もありました。その中でこうした今から説明する数字が出るわけです。特に強調しておきたいのは、この南京の判決は、実は 1946 年に出しております。この東京の判決は 1947 年に出ているわけです。右翼はよく、きのうも名古屋で右翼が騒いでいましたが、これは中国の捏造（ね

っぞう)だと、中国がつくり出した最大の嘘(うそ)だと言います。しかし、皆さん今この数字で気付いたと思います。1946年、1947年には中国はまだ成立していないんです。中国が成立したのは1949年です。だから、そういった言説がまったく頓珍漢(とんちんかん)な言い分だというふうに思います。この南京の裁判においては28件におよぶ大規模虐殺が認定されました。そしてそれ以外に858件の小規模な虐殺の案件が立証されております。今この両方合わせて約880件の案件それぞれの調査資料が今、中国第二歴史档案館という資料館の中にすべてきちんと保管されております。

この南京法廷での判決は非常に公正なものだというふうに思います。先程言いました28件の大規模虐殺で19万人の虐殺が認定されました。そして小規模の虐殺は15万人の虐殺が認定されました。これの数字を合わせると34万人になるわけです。しかし法廷は、当然戦争の混乱期ですから、例えば百単位、千単位の誤差というのも十分考慮して、少なくとも30万人以上という判決がそこには出ているわけです。

もう一つ、東京の極東国際軍事裁判においては、20万人以上という判決が出ております。しかし皆さん注目していただきたいのは、それには付帯があります。「ただし、日本軍によって死体を焼き捨てられたり、長江に投げ込まれた死体、またはその他の方法で処分された人々を計算に入れていない。」と書かれています。当時、中国の埋葬記録でも、そして日本軍の埋葬記録でも、日本軍は15万人と言っていますし、中国側の埋葬隊は18万人と言っております。どちらにしろ、それを合わせると30数万人という数字になるわけです。だから、南京法廷の数字と東京裁判の数字は違うというふうな誤解があるようだけれども、実は同じ数を示しています。

ここで一つ追加の話をさせてください。先程私もちよっと言いましたけれども、昨日、名古屋で集会を開いたとき右翼が紛(まぎ)れ込んで、彼は大声を出して騒ぎました。「当時、南京には20万人しかいなかった」と、「南京の面積は名古屋の港区よりも小さかった」と、非常に滑稽(こっけい)甚(はなは)だしいことを喚(わめ)いていました。もう皆さんはご存知だと思います。右翼の論調は、これは何かと言いますと一つのトリックですね。当時、南京城内の一部にあった、いわゆる難民区〔国際安全区〕というものがありますけれども、その人口なんですね、20万人というのは。そして面積が3.86 km²、非常に小さな範囲ですけれども、その人口とその面積をもって、当時の南京はそれだけの人口、それだけの面積しかないというふうに喚いているわけです。

これも皆さんご存知かもしれませんが、当時1937年4月の段階で、もうすでに統計の数字が出ているわけですね。101万人強の人口があるというふうに統計が出ております。皆さんご存知のように、当時数億の人口のある中国の南京は首都です。その後、国民政府は首都南京を捨てて逃亡するわけですが、その1937年11月段階でも、その時の統計だけでも60万人の市民がまだ残っていたというふうに記録されております。南京の当時の面積に関する数字をちょっとだけ紹介します。先程言いました、難民区(じやうか)の面積は3.86 km²です。そして城郭(じやうかく)で囲われた面積は47 km²です。そして南京市全体で言いますと470 km²になります。もう説明するまでもないと思いますけれども、先程の右翼の言う言説がまったく事実に反するという事は言うまでもないことかと思えます。

話を戻します。この30万人というもう一つの根拠、それは埋葬記録からもそれが窺(うかが)われます。

次は、当時、遺体を埋葬する団体がいくつかありました。この主だった団体が四つあるんですけれども、この団体がそれぞれ収集した遺体の数がこのような数字になっております。それを合計すると 38 万人におよぶわけですが、どうしてこんな細かい数字が分かるのかということですが、実は当時この遺体収集の作業員には賃金が払われておりました。その賃金を払う段に当然、何人の遺体を埋葬したか、それは男か女か、何才ぐらいか、という詳細な記録を実は残しているわけです。それに基(もと)づいて賃金が払われるわけですね。そういう意味でこの数字がここに出てくるわけです。そうした非常に細かい資料が今すべて南京の档案馆、資料館ですね、に保管されております。この 38 万という数字、実はこれほど多くはないと私も思っています。それは上三つ、中国側の埋葬記録は正確に数字は出ているんですけれども、最後のところ、日本軍が廃棄した死体に関しては重複の可能性があるわけです。例えば死体を長江に流します。そうするとその死体の下流に流れてしまう、あるいは水中に沈んでしまう、あるいは川辺に打ち上げられます。その川辺に打ち上げられた死体を、埋葬隊がそれを収集して改めて埋葬する。するとこの数字は重複してしまうわけですね。そういう意味で重複はもちろん考えられます。しかしその数が何十万にもなろうはずもないので、それを差し引いても 30 万を下回ることは絶対にないというふうに思います。

平和に関わる活動

私たちの記念館に来られた方はご存知だと思います。この館の形は実は左上のように、舟の形をしています。「平和の舟」と私たちは呼んでいます。この前半部分は主題を「歴史」というふうにおいています。そして後半部分は「平和」というふうに位置づけております。前から入ります。歴史を経験します。そして歴史を知ることによって、あと出るときには平和という概念をもって出て行く、という思いを持った構造になっています。私たちのこの記念館はこうした平和に関わる活動も行なっております。

これは 2001 年、アメリカの 9.11 が起こった後ですけれども、サンフランシスコの聖マリナーズ大聖堂で世界の五大宗教が一同に会しました。歴史的におそらく初めてのことだと思います。この慰霊祭が行なわれるわけですけれども、9.11 の犠牲者と共に南京大虐殺の受難者、そして世界の受難者に対して祈りを捧(ささ)げたわけです。この教義が違ういくつかの宗教が一緒になるというのはなかなか難しい面があったんですけれども、実現することができました。そしてアメリカとは直接は関係がないというか、直接の加害者、被害者ではない南京大虐殺の犠牲者もそこで慰霊する、弔(とむら)うというのは、非常に画期的なことだったと思います。

それ以外にも毎年、各地の青年たちを集めてフォーラムを開きます。各国の若者たちの交流をその場で深めてもらいたいという願いです。

これは在日中国人の人たちの寄付によって造られた「平和の鐘」というものです。そういう意味で私たちの記念館は歴史博物館であると同時に、平和を発信する博物館でもあるわけです。

世界記憶遺産登録

もう時間もあまりないので、最後に私たちのこの南京大虐殺の案件が世界記憶遺産に登録された、その経過について少しお話しします。

この写真は 2015 年にアラブ首長国連邦の首都アブダビで行なわれた登録申請の場所で、私も行きました。これはその登録された時の報道です。まずこれを少し観てい

ただいて、後程また説明させていただきます。

すべて中国語なので、おそらく聴いている方は分からないと思いますので、ちょっと変えまして、私から説明させていただきます。

これは皆さんあまりご存知ないかもしれないんですけども、実はこの南京大虐殺の案件の世界記憶遺産への登録は中国人が初めにやろうとしたわけではないんですね。当時、私たちはそれを世界記憶遺産に登録しようというふうには実は思っていませんでした。実は、ユネスコの文化教育委員会の主席でありましたフィリピンの方で、カモン・パウラさんという女史がおりましたけれども、この方が私たちの記念館を訪れたときに、マギー・フィルムと映写機を見て非常に驚いたわけです。その他の資料も見て、これは完全に世界記憶遺産に登録するに値する内容だということで、これはぜひとも登録申請すべきではないかというふうに言ってくれたわけです。

世界遺産について少しだけ説明します。例えば文化遺産とか自然遺産とか六つあるわけですけども、それぞれ基準が違います。私たちは当初、例えば広島原爆ドーム、あるいはアウシュビッツ強制収容所と同じ世界遺産に登録しようかというふうに思ったわけですけども、その後、先程のフィリピンの方の提案に基づいて記憶遺産のほうを考慮するようになりました。そして8年かけて資料を精査して申請するわけです。その中で特に注目すべきものは、先程言いましたマギー・フィルムですね。そして映写機、そして当時の埋葬記録と戦犯裁判の記録、そして中国の別の都市の資料館にあったんですけども、日本軍が後程南京で埋葬に関わった、その時の埋葬記録などがその登録の中身です。これはすべて原本で、一級資料のみを選定しました。皆さんご存知のように、実はこの南京大虐殺に関しては、ラーベの日記とか、ヴォートリンの手紙とか、そういう非常に重要な物があるんですけども、その現物は私たちの記念館にはありません。ドイツの彼、アメリカの彼女の家にあったりするわけです。それは非常に重要ではありますが、その現物がない、一級資料ではないということで、今回の登録からは私たちは外しています。一級資料のみによる登録です。この審査には世界各国から24人の委員が選ばれます。そしてこうした人たちが記憶遺産を審査する基準に基づいて判定します。その基準は、その資料の真実性、あるいは世界的な意義、あるいは無二の非代替性、こうした基準に基づいてその資料を精査するわけです。

これが世界記憶遺産に登録された後、日本政府の反応は実に滑稽でした。まず最初に言ったのは、日本政府の意見を取り入れていない、聞き入れていない、ということでした。元々この世界記憶遺産の登録には、そういう過程というものがないんです。基準に合致しているかどうかを審査するわけですね。相手国のどうのこうのというのはまったくありません。先程ちらっと出ましたけれども、例えば日本のシベリヤ抑留がやはり登録されました。じゃあ日本がロシアに意見を求めて共同で出したのかと。それはあり得ないことです。このことを私は知らずに、日本に来てから知ったんですけども、日本政府はユネスコの分担金を保留する、払わないというふうなことをやっていたそうです。非常に驚きました。こうした問題をお金の力でどうこうしようという、この何と申しましょか、非常に世界にとっても笑い種(ぐさ)だというふうに私は思っています。

最後に

私たちがこの南京大虐殺を研究し、あるいはそれにこだわるのは、決して憎悪を増幅するためでももちろんありません。それはこうした歴史を教訓にすること、未来に

向けてそれを役立てること、それが最も大切だと思っております。私は歴史を勉強するものですが、私個人の思いから言いますと、今の日中関係、特に政府間が非常に悪い状態になっています。どん底の状態だとも思います。しかし私は以下の三つの理由で期待ももっております。

まず最初は、私は民間の力、草の根の力を全面的に信じています。まさに今来られている皆さんもそうです。こうした歴史事実をきちっと捉（とら）えよう、そして平和の運動をずっと続けてきておられます。これは南京に限ったことではありません。平和憲法を守ろうという、そうした運動も含めて、そして調査活動、先程のビデオを観まして私は非常に感動しました。あれ程緻密（ちみつ）に調査して、そして歴史を残そうという姿勢、こうした民間の力がある、非常に強固にある。私は日本の人たちに対して心からの敬意を表したいと思えます。顧（かえり）みれば、日中の間は二千年以上の歴史があるわけです。こうした不幸な時代はほんのわずかな時代にしかすぎません。友好の歴史が基調だと思っております。

もう一つは文化の問題だと思えます。いわゆる東洋文化というものが世界で再び見直されようとしています。いわゆる西洋文化の行き詰まりの中で東洋文化の見直しがあります。東洋文化というものは決して中国だけのものではありません。日本も韓国もアジアも含めて、東洋文化という共通の文化を持つ共通性、それにも私は期待を持っています。

もう一つ最後は経済の問題だというふうに思います。今、アジアの経済は多少の変動はありますが、全局的に見れば世界において今、経済の中心はアジアに移っているのはもう紛れもない事実です。日本、中国、そしてアジアの国々が一つに団結することによって、今言った、例えばアジアの文化、あるいはアジアのこうした経済を発展させる上で、是が非でも団結しなければ成り立たないんだというふうに思います。団結してこそその恩恵を受けることができるという意味で、私は期待を持っています。

これからも皆さんと共にこの歴史の真実を伝え、そしてそれを教訓にした平和運動を構築していきたい。そのために努力したいと思うわけであります。ともに頑張りましょう。ありがとうございました。

司 会：半沢英一

どうもありがとうございました。多少時間があるようなので、ご質問があるようでしたら、一つか二つぐらいは受けていただけるとは思わないかと思うのです。ご質問がある方は挙手（きょしゅ）をしていただきたいと思います。

質 議：佐々木さん（女性）

貴重なお話、ありがとうございました。私が中国に留学していたときに中国人民抗日戦争紀念館に行ったことがあります。また、その前に広島市の平和記念資料館〔原爆資料館〕にも行って、この二つはすごく違っていて、私の感じ的には抗日戦争紀念館に行った後は日本への悪い印象しか余り残らなくて、戦争というのは悪いことだなあとは余り残らなくて、きょうの朱成山さんの話を聞いて、きっと南京の博物館は平和に目を向けている博物館なんだなあと、行きたいなあと、思ったんですけど

れども、質問としては記念館ごとにかなり性格が違っていると感じてしまうのは何ですかね。それは私が日本人だからですかね。

あともう一つは、そういう博物館を造る資金というのは政府から出してもらっているのですかね。そうするとやはり政府の意向も入っているのですかね。お願いします。

応 答：朱成山さん

今の方の質問に直接的な答えにはならず、間接的な答えになるかもしれませんが、まずはそれだけ言わせていただきます。

まず私たちの記念館は、主要なテーマを象徴する三つの言葉を展示の一番大きな所に、他よりもはるかに大きな字で展示しています。次の三つの言葉があります。

一つは、先程のマギー牧師の言葉があります。それは「許すことはできる。しかし、忘れてはならない。」という言葉です。

もう一つは、先程言いましたね、李秀英さんという幸存者、被害者です。彼女の証言は皆さん聞いたかもしれません。非常に酷（ひど）い目に遭（あ）った方ですけれども、彼女はこう言いました。「歴史は残さなければならない。でも、恨（うら）みは残してはならない。」という言葉があります。

もう一つは、南京法廷の裁判官でありました、中国の裁判官が言った言葉です。「軍国主義の罪悪を日本の民衆の上に被せることはできない。しかし、歴史を忘れれば同じ過ちを犯すことになる。」という、この三つの言葉を掲げています。

先程言いました、七・七〔盧溝橋事件〕の北京の抗日戦争記念館も、実は平和のテーマは確かに最後にあるんですけども、その辺は私たちの記念館とは、趣旨と異なりますか、少し違うのは事実です。例えば、先程言いました北京の抗日戦争記念館は北京市の所管です。南京の記念館は江蘇省と南京市の所管です。国ではなくて地方の政府が負担しております。

もう一つは、最近特に多くなったのは、以前はこうした負担金と、そしていわゆる入館収入で賄（まかな）っていたんですけども、2004年からは入館料を無料にしました。初めてこの記念館が無料にしたんですけども、その後、各地の記念館も無料にするようにということで、今、中国全体の記念館の85.5%が無料だそうです。

それともう一つは、先程紹介もしました、「平和の鐘」が在日中国人の寄付で成り立っている、あるいは足の型の道路が教員組合の寄付によって造られたという、そういう各界からの寄付で成り立っている面もあります。

今の若い方の質問は非常に有意義だなあというふうに思います。それに関連して少しお話させてもらおうと、日本のマスコミ、中でも右のマスコミを中心に私たちの記念館のみならず、私は「反日の親玉」、そして記念館が「反日の根拠地」というふうに、どうも思っているようです。私はもちろん反日ではありません。二つの例をあげたいと思います。

一つは、例えば今回、私は日本に来ました。私は実は5日間の予定で本来来る予定だったんです。しかし、日本の各地の人たちがぜひとも会いたい、古い友人だから会いたいということで、結局2週間、14日にわたって11カ所をまわることになりました。そして、その会場ごとに古い友人たちとの交流がなされております。私が帰ってからぜひ一冊本を出そうかなと考えております。そのテーマは『私と日本の友人100人』という本です。これは現実的にはもちろん100人では済まないんですけども、象徴的に100人ということにしました。

もう一つは、数年前に中国で、いわゆる「反日デモ」が盛んに行なわれたときがあります。皆さんご存知ですね。南京では一回も起こっていないんですね。なぜかと言いますと、南京の記念館には日本の人たちがたくさん来ます。そして、非常に南京のことを記憶に残そうという努力されています。そうした行ないが南京のテレビやニュースに頻繁（ひんばん）に出ています。南京の市民たちは日本の中にもこうした歴史を正視し、そして友好を願っている人たちがたくさんいるということ、みんな知っているわけです。そして理性的な面をもって、その時代にもそうしたデモとかもまったく起こらなかったということで、おそらく今の質問に対する私の回答になろうかと思えます。

司 会：半沢英一

どうもありがとうございました。それでは閉会の挨拶を、我々の実行委員会の代表の一人である、金沢大学の歴史学者の古畑徹さんをお願いします。

閉会の挨拶：古畑 徹

きょうは本当に良（い）い話をありがとうございました。一番最後の受け答えも良い締めだったと私は思っています。

この会のことは最初のほうで森代表が話をされましたけれども、1996年から長いことずっと証言集会を開いてまいりました。実は私は証言集会の最後にいつも出てきて、解説をするという役割をずっと十何年間かやってきたんですが、とうとう生存者が高齢になられて日本に来るのが難しい状態になったとき、ちょうど昨年ですが、「ジョン・ラーベ」上映実行委員会ということで違う形のものがスタートしました。今年も無理かなあと感じていましたら、朱成山名誉館長が来られるという話になりまして、今回もその実行委員会が主催したという次第でございます。

ちょうど世界記憶遺産の話をされるということを知っていましたので、どういう話になるのかなあと楽しみにしておりました。それと同時にいろんな新しいことも聞かせていただいたのですが、何といても聞いていて一番印象的だったのは、一つはやはり広島との繋（つな）がりがあがっていたこととございました。それと同時に、いろいろと言われていることに対して、まあ言ってしまうと、いろんな嘘を何度も言っていると本当のように聞こえてくるわけですが、それにどう対抗するかということで、着実に資料を集めて、本当に歴史研究の一番の王道ですが、それをされて積み重ねていく。その蓄積の結果の中にこういう世界記憶遺産登録という方向に行くというものがあつたという、そういう積み重ねを地道にやっていくということの意味というものが改めてよく分かるお話でした。

さらに、この記念館に私は1996年に初めて行って、それ以後一切行っていませんが、映写されていたものを見せてもらうと、その後だいぶ変わっています。それと同時にきょうの話の中で、当時は記憶に残すことにはかなりウェイトがあつたと思いますが、そこが更に発展して平和の方向へかなり動いているのもよく分かりました。非常にこの間の活動の発展の過程、そして方向性というものがきょうはよく分かる話だったというふうに思います。その意味でも非常に意味のあるきょうのお話だったと思います。私も行きたいと思いますが、皆様にはこの話を聞いて、新しい記念館ぜひを一度訪ねていただけたら、きょうの話はもう一つ意味があることになるかな

と思っております。

きょうは本当に朱成山さんにはありがとうございました。最後の話もとても良い答えだったと思っていますので、そのことも含めて、改めて朱成山さんに拍手をいただけたらと思います。

司 会：半沢英一

どうもありがとうございました。最後にちょっと事務連絡を二つばかりさせていただきます。一つは、皆さんのお手元にあるアンケートに、ぜひきょうのご意見、ご感想などを書かれて、出口の所にあるアンケートの箱に入れていただきたいと思います。もう一つは、2月12日に田中伸尚（のぶまさ）さんが、有名な国家主義に対する著書をだいぶ書かれている方ですが、金沢に来られて講演するというので、漆崎さんからその紹介だけを最後にさせていただきます。

講演会の紹介：漆崎英之さん

皆さん、大事な時間を申し訳ありません。田中伸尚さんが2月12日に金沢に来て講演をしてくださいます。場所は、皆さんのこのチラシ「2017 日本のうたごえ祭典 in いしかわ・北陸」ですね、この「いしかわ総合スポーツセンター」の前の金沢教会です。私はいつも2月11日は名古屋で信教の自由を守る集会を毎年、祭司（さいし）として行なっております。それで金沢にいることはできません。2月12日に田中伸尚さんに名古屋での集会を終えて、金沢に来て下さることをお願いしました。ここにチラシが入っております。ちょっと田中先生の最近の本ですね、10月21日にこの『飾（かざ）らず、偽（いつわ）らず、欺（あざむ）かず』という本が出版されました。この管野須賀子（かんのすがこ）は幸徳秋水の妻です。それから伊藤野枝（いとうのえ）は大杉栄の妻です。管野須賀子は大逆事件で刑死に追いやられ、また伊藤野枝は関東大震災における甘粕事件において虐殺された、この20代の女性、これを取り上げて現在の問題と結びつけております。きょう10冊持って来ました。割引になっております。どうぞ必要な方はお買い求めください。ありがとうございました。

司 会：半沢英一

どうもありがとうございました。それでは南京大虐殺記念館・名誉館長講演会を終わらせていただきます。

以 上